

18 器質的異常のない右陰嚢痛に対して

桂枝茯苓丸が奏功した一例

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院 泌尿器科

佐井 裕紀、阿部 宏紀、小林 幹典、百田 絢子
松山 愛佳、加藤 隆、平林 裕樹、鈴木 省治

【緒言】陰嚢痛は我々泌尿器科医師がよく遭遇する症候である。精巣捻転や精巣上体炎など西洋医学的治療法が確立したものがある一方で、器質的異常がなく鎮痛薬内服などの対症療法で経過をみる例もある。今回、器質的異常のない右陰嚢痛に対して桂枝茯苓丸が奏功した一例を経験したため報告する。

【症例】69歳男性。10日前からの右陰嚢痛を主訴に受診。既往歴に高血圧、多血症、糖尿病、片頭痛がある。母の介護のため3か月前から休職中である。

【現症】身長173cm、体重70kg。色黒、筋肉質で手足が冷えしびれることがある。胃がむかつくことはないが、軟便の傾向がある。精巣は左右同大で弾性、圧痛はみられない。精索静脈瘤はみられない。尿定性・沈査で膿尿はみられない。超音波では精巣は内部均一で腫瘤はない。水腎はみられない。KUB、CTでは尿路結石はみられず、その他陰嚢痛を来たす疾患はみられない。

【臨床経過】桂枝茯苓丸(TJ-25)7.5g/日を処方した。2週間後再診時、右陰嚢痛は軽快傾向にあったが、日によって症状にムラがあるとのことだったため、アセトアミノフェン1200mg/日を追加した。以前からの手足のしびれが軽度改善したとのことだった。さらに2週間後再診時には、右陰嚢痛がほぼ消失したため、アセトアミノフェンは終了した。桂枝茯苓丸は漸減し、廃薬とした。1か月後再診時、2-3日程度右陰嚢痛が出現する日があったとのことだった。桂枝茯苓丸の頓服で症状軽快するとのことで、現在も症状出現時頓服とし経過良好である。

【考察】桂枝茯苓丸は「金匱要略」婦人妊娠病脈症并治第二十に記載されている処方であるが、辜丸炎にも適応があり、精索静脈瘤による慢性陰嚢痛に対して有効との報告がこれまでも複数発表されている。本症例では精索静脈瘤はみられなかったが、慢性陰嚢痛の原因として慢性骨盤内うっ血症候群が背景にあることを想定し、駆瘀血剤が適すると考えた。実証の瘀血であったために、桂枝茯苓丸が有効であったと考えられた。

【結語】器質的異常のない右陰嚢痛に対して桂枝茯苓丸が奏功した一例を経験した。